

ひ 飛 町
か だ ま ち ょう
ひ 飛 町

藤原京造営の工匠基地

この町の南東に隣接する上飛驒町を合わせた一带に古代、木工に秀でた多数の飛驒匠（ひだのたくみ）が岐阜県の飛驒高山から招集され、日本初の都城・藤原京造営のため長く住んでいたと伝えられています。

藤原京造営が終わったあとの天平勝宝八（七五六）年に、孝謙天皇が当地の「飛驒坂所」と呼ぶ領地を南都・東大寺に与えました。その書き付けが内閣文庫所蔵の東大寺文書として残っています。当時すでに「飛驒」の地名が定着していたこととなります。

この領地はその後、幾多の変遷を遂げながらも鎌倉時代の後期まで東大寺の領有が続きませんが、室町時代の後期に至って当地の豪族・越智氏の支配下に入っています。

江戸時代の始めごろから飛驒村と呼ばれた当地は、幕府や郡山藩などの領地となったあと延宝七（一六七九）年に再び幕府領となります。

明治二二年に鴨公村の大字となった同地が、昭和三一年の檀原市発足で飛驒町となりました。

古代朝廷に全国の各地から動員された人々が、出身地国名を大和（奈良）の居住地名に使った名残の一つが、この「飛驒」です。